

摘まれなかったバラ

— 『バラ物語』論争と擁護派の論旨について —

月村辰雄

1. 論争の年譜

1401年春から翌年年末にかけて、ジャン・ド・マンの『バラ物語』後編をめくり、もっぱら書簡の応酬という形で、いわゆる『バラ物語』論争が繰り返られた。反『バラ物語』論を展開したのは、クリスチヌ・ド・ピザンとジャン・ジェルソンであった。これに対し、ジャン・ド・マン擁護の論陣を張ったのは、国王秘書官のジャン・ド・モントルーユとゴンチエ・コル、および後者の弟でパリのノートル・ダム教会参事会員ピエール・コルであった。本稿の関係する範囲において残された資料を列記すれば、次のような年表が作成される(本稿では以下、カッコ内の符号によって資料を指示する)。

1401年 5月末頃	モントルーユ、	『バラ物語』称揚の書簡(A)
同	同、	ピエール・ダイイ宛添え状(B)
6~7月	ピザン、	モントルーユ宛反論書簡(C)
7~8月	モントルーユ、	ある法曹家、ある聖職者、およびゴンチエ・コルに宛てた5通の書簡(D,E,F,G,H)
8月25日	ジェルソン、	コレージュ・ド・ナヴァールでの説教
9月13日	ゴルチエ・コル、	ピザン宛書簡(I)、反論書簡送付を要求
9月15日	同、	ピザン宛書簡(J)、反省を促す
9月末	ピザン、	ゴンチエ・コル宛反論書簡(K)
1402年 2月1日	ピザン、	王妃宛てに一件書類提出、献辞(L)
	同、	ギヨーム・ド・ティニョンヴィル宛てに一件書類提出、献辞(M)、解題(N)
5月18日	ジェルソン、	反『バラ物語』論(O)
夏(?)	モントルーユ、	ある詩人宛書簡(P)、助力要請
夏の終り	ピエール・コル、	ピザン宛書簡(Q)
10月2日	ピザン、	ピエール・コル宛書簡(R)
11月(?)	ピエール・コル、	ピザン宛書簡(S)、未完
12月下旬	ジェルソン、	擁護派非難の説教
同(?)	同、	ピエール・コル宛書簡(T)

この論争については、最近、E. Hicksにより資料集が刊行され、また特に上記の諸書簡の年代決定に関していくつかの研究が公刊されている¹⁰⁾。

ピザンは論争を終始リードし、『バラ物語』は社会の良俗を損なうと主張し続け、ジェルソンはそのピザンを側面から援助した。一方、当時として一流のユマニストという評価を得ている擁護派のほうは、ともすれば反対派の道徳論にひきずられ、いわば不得手の議論を強いられた恰好で、自身の主張といったものを十分には尽くしていないように見受けられる¹¹⁾。本稿では、まず最新のE. Hicksの『資料集』と年代決定とを参照しながら論争の全体像を復元し、ついで、今まで触れられることの少なかった擁護派の論旨に焦点を絞って、なぜ彼らが劣勢に立たされたのか、なぜ彼ら独自の見解を十分に展開できなかったのか、という問題を考えてみたい。

2. 発端

若くして寡婦となったクリスチーナ・ド・ピザンが、亡き夫への愛の思い出のために再婚を嫌い、三人の子を抱えながら筆一本で生活の資をえようと決意した次第は、よく知られている通りである。彼女は王妃イザボア・ド・バヴィエールに近づき、当初は韻文の才を高く賞でられ、求めに応じて器用に小品を綴っていたが、1399年、初めて大がかりな作品『愛神への書簡詩』¹²⁾を公にする。この10音綴詩句800行の作品は、恋に心の痛手を負った婦人たちが、恋愛における男性側の身勝手、非道を愛神の前に訴えるという形式をとるが、その中で彼女はオウィディウスの『恋の技法』・『恋の治療』とジャン・ド・マンとを槍玉にあげた。

ピザンはまずオウィディウスを攻撃する。ピザンによれば、これらの書物は「まことの愛のしきたりと習わしを教えるものではなく、まさにその反対で(vv. 372-3)」あって、「いかに装って女を欺き、そして手中に収めるか(vv. 368-9)」を説く詐術の書である。いったい、男は一方で女が浅薄でたわいないものだとして罵っておきながら、その女を手に入れるために、どうしてこのような策略を取って弄するのであろうか。「バラ物語」におけるジャン・ド・マンも同様で、なんとくだくだしく骨折りの仕事だろう。彼はそこに明快な、また難解な知識を盛り込み、そして大がかりな恋の冒険を描いた。しかし、結局これが目的なのだが、たかが一人の小娘であるのに、策略と欺瞞をもって籠絡するよう、実に多くの人々が心を誘われ、実に多くの工夫と悪だくみが考え出された。(小娘という)か弱い砦に、この大仰な攻撃がはたして必要なのか(vv. 389-97)」。オウィディウスやジャン・ド・マンほどの人が学識の限りを傾けて女性誘惑の方法を説くのは、一般に女性というものがそれだけ志操堅固だからである。従って、彼らが女の放縦や浮薄を嘲笑するのは、まったくいわれがないと同時に、彼らの論理的矛盾ということにもなる。

以上が『愛神への書簡詩』における『バラ物語』への言及のすべてであるが、当然

のことながらピザンは1399年の前後、たくみに相手方の議論を逆手にとったこの種の反論を、王妃の周囲に触れまわっていたものと考えられる。

ところで、14世紀末のパリには、すでに一群の古典愛好家のグループが存在していた。現在までの研究が明らかにしているところによれば、その中核は国王秘書官のゴンチエ・コル Gontier Col とジャン・ド・モントルーユ Jean de Montreuil、およびモントルーユとはナヴァール学寮で同窓の間柄で、当時はアヴィニョンで教皇秘書の職にあったニコラ・ド・クラマンジュ Nicolas de Clamangesの三人である。コルが最年長らしいが、彼らはほぼ同年配で、いずれも1350年代前半の生まれとされる。モントルーユおよびクラマンジュにはラテン語書簡集が残され、彼らの間にかかなりの量の手紙のやりとりがあったことが確かめられるが、とりわけウェルギリウスとオウィディウスの優劣をめぐる、1397年から1400年にかけてコルとモントルーユの間に生じた確執を伝える一連の書簡は、彼らの古典文学に対する態度を窺わせる点で興味深い⁽⁶⁾。

反目の原因は、ミラノからやって来たアンブロジオ・デ・ミッリ Ambrogio de' Migli という、多少とも古典古代文学を解するイタリア人が、モントルーユを愚弄した出来事に求められる。モントルーユのクラマンジュ宛の手紙によると、アンブロジオには奇矯の言辞を弄する癖があって、ウェルギリウスとケケロを崇拝していたモントルーユの古典の趣味が、いかにも定説通りで稚拙にみえたらしい。そこで、本場からやって来たという自負もあらわに、オウィディウスを持ち上げてウェルギリウスを相当に貶め、またケケロについてもその言説には多くの矛盾があると難じ、モントルーユを嘲笑した。さらに、アンブロジオはモントルーユの無知を笑った手紙をコルに寄せ、内心オウィディウスを高く評価していたコルがアンブロジオをたしなめせず、この冷笑的な手紙をそのままモントルーユに回送したことから、今度は二人の国王秘書官の間が険悪となった。モントルーユの書簡集には、友情に背いたコルを非難し、かつコルの妻の口を借りてその道徳的頹廢まで告発する戯作的な手紙が残されている。

彼らの反目は、クラマンジュの斡旋もあって、その後うやむやのうちに解消されたようであるが、ここで指摘すべきは、後年の『バラ物語』論争における書簡の往復による論戦という形式が、すでに一応は整えられている点であろう。ただし、たとえばモントルーユが伝えるウェルギリウスとオウィディウスの比較論について明らかとなることであるが、彼らの議論がいわば作品の内在的価値のレベルに踏みこまず、単にどちらが偉大であるかといった人物評に終始している点も留意されなければならない。確かにモントルーユは当時として一流の古典愛好家であった。しかし、古代作家の名を列挙し大げさな賛辞を並べただけで、作品の内容には一切言及しようとしないうその書簡から窺うかぎり、最初のユマニストという評価は割引して考える必要がある。彼は『親しき者への手紙』のケケロや小プリニウスを気取って書簡作家たらんとし、皮肉と諷刺とを文人趣味の身上としていたが、「そうした自負にもかかわらず、いくら古典を読んでみてもいっそうに文体は磨かれなかった。それどころか、文意さえ常に明晰と

いうわけでなく、また皮肉もあまりに謎めかされていた。結局、本来の語義を逸脱してしばしば解釈不能になった新造語や稀語のたぐいのせいで、彼のラテン語はわかりにくく不正確である」⁹⁾。そして、この稚拙と気取りがひとりモントルーユのものだけでなかったことは、『バラ物語』論争の検討を通じてますます明白となるであろう。

59人という定員を定められた国王秘書官は、多く国務会議や会計院などの役職を兼務する実務官僚であり、きわめて多忙であった。たとえばこの時期、コルは対英交渉にかかわり、英国側に通行許可証を申請した上でカレーやブローニュ・シュル・メールに何度も赴いているし、またモントルーユはドイツへの外交使節として1400年10月にパリを立ち、1401年1月下旬にパリに帰っている¹⁰⁾。そのモントルーユに、コルが『バラ物語』を読むよう勧めたのは、パリ帰着直後のことであつたらしい。王妃周辺でピザンを中心に氣勢をあげる反『バラ物語』派をこころよからず思っていたコルがたきつけたのであろうが、モントルーユは感銘を受けた結果、『バラ物語』称揚の書簡(A)をある高名な学者 un notable cleric に宛ててフランス語で書きあらわし、さらにこれをピザンにも送付した。それまでの彼の書簡がすべてラテン語であるところから推測すると、この書簡(A)はむしろ、ラテン語の読み書きの習慣のないピザンとその周辺を標的としていたように思われるが、ピザンの覚書(後出のN)によれば、第一の名宛人であるこの学者もまた反『バラ物語』派である。ただモントルーユは、こうした挑戦に一抹の危惧を抱いたものか、ナヴァール学寮でのかつての師であるピエール・ダイイに比定される人物にもこの称揚書簡を送り、あわせて103番書簡(B)¹¹⁾を添えて、自分の見解についての評価を乞うている。ただし、論争の発端となった書簡(A)は現在に伝わっていない。

3. 反響

Hicksの推定によれば、1401年6~7月ごろ、クリスチヌ・ド・ピザンはかなり長文の反論書簡(C)をモントルーユに宛てて送った。言葉づかいは丁寧で、もちろん相手をvousで呼び、モントルーユのように学殖の深い人物に自分のごとき無知な者が反対するのはいかかかと思うが、という謙遜の辞で始まっているが、それでも『バラ物語』糾弾の論旨は明快で、かつ議論は執拗である。

まずピザンは冒頭に結論をくだす。『バラ物語』は有用の書というより閑暇の所産であり、一般に暇つぶしの仕事からは悪や災厄しか生じないがゆえに、この書物はよろしくない(-1.58)¹²⁾。以下、具体的な反論が始められるが、次のように7部分に分割すれば論旨がとらえやすい。①<理性>Raisonが何度かにわたって男性性器 couilleの名を口にしますが、神の被造物とはいえ、原罪の後には罪に汚れたのであるから、この名を口にすべきではなかった。また、この名をたとえば「聖遺物」reliqueという名によって言いかえてみても仕方がない。名が汚れの原因となるのではなく、むしろ事物自体が汚れを作るのである。むろん、病気の診断の際などのように、必要に迫られて口にせざ

るを得ない場合があるが、その時でも廉恥心を傷つけぬ範囲の名を選ぶべきである(-1.94)。②<理性>が「恋の戦さでは、欺かれるより欺くほうがよい」と述べるくだりがあるが、両方とも道徳的に勧められることではないので、「欺くより欺かれるほうがより悪くはない」と表現すべきであった(-1.105)。③<老婆>Vieilleと<嫉妬深い夫>Mari jalouxが述べる女性への愚弄に満ちた悪口の条々は、社会の良俗を損ない、若者をして結婚に嫌悪の情を生ぜしめ、およそ道徳に反する(-1.130)。ただし、この部分にはその後の議論の一つの焦点となる問題が、萌芽的な形であらわれている。それは登場人物の問題であって、ピザンは次のように言う。「ここに記されている女性への悪口であるが、著者を許すために多くの人はそれは<嫉妬深い夫>が述べたのだと主張する。しかしその科白は、実に、神がエレミヤの口を借りて述べるのと同じように作られているのだ(II.121-124)」。

つまりピザンは、登場人物の科白についてそれを虚構とみなさず、作者ジャン・ド・マンの責任を追及する立場を明白に表明しているのである。

④<ゲニウス>Genius が生殖を勧めるくだりのいかがわしい調子は論外である(-1.161)。

⑤作者は好んで女性を嘲弄するが、<ゲニウス>が生殖を勧めながら、一方で女を避けるように言うのは矛盾している(-1.258)。

⑥物語の結幕のバラを摘むくだりは、聞くだけに恥ずかしい。さらにピザンは続ける、「もしあなたが作者を許すために、ジャン・ド・マンはこうした比喩のうちに新しく見事な方法によって恋を完成させようとしたのだ、と主張するなら、いや、作者は(比喩があらわす事実の点では)なんら新奇のことは語っていない、と私は答えよう(II.274-277)」。

⑦作者の才幹をもってすれば、より有用の作品を作ることができたであろう。確かにすべてが悪いというのではなく、美しいページもあるが、それだけにこの書物が危険だということであって、かえって悪の部分もたやすく信じこまれてしまうであろう(-1.352)。

以上、やや詳細にわたって内容を紹介したのは、ピザンの第一の反論の中に、その後の議論で取りあつかわれる論点がほぼすべて出揃っているからである。ピザンはまず不道徳を攻撃し(①~④)、さらにこれは『愛神への書簡詩』で述べられていたが、好色な女嫌いとも称する立場からなされる女性嘲弄におそらくは必然的に含まれる論理矛盾を衝く(⑤)。登場人物の役割(③の一部)と比喩の機能(⑥)については、すでにいくぶんか擁護派の主張を耳にしている口振りであるが、これもすべて一蹴する。結論部(⑦)は二部に分かれ、作品は有用であらねばならぬとするのが前半であるが、これに対しては擁護派も一切の論評を控えることになるだろう。ほかならぬホラティウスの『詩論』中に説かれ、それをもとにジャン・ド・マン自身も作品中に確言している命題だからである⁹⁾。また、後半部分は、この後反対派が好んで発展させる論拠の一つとなり、かつ①~④の道徳的な論点と融合することになるだろう。

ところでピザンの反論書簡(C)は、なかば公開の形で、王妃と王弟ルイ・ドルレアン
の宮廷関係者のみならず、高等法院やパリ大学の方面にも流布したものと思われる。
1398年にパリ大学総監督Chancelier de Notre-Dame de Parisの職をピエール・ダイイカ

ら引きついでジャン・ジェルソンまでが、それまでピザンと近いつきあいがあった形跡もないのに、モントルーユとピザンとの間に始められた書簡の応酬に気づき、擁護派の論調に隠やかならざるものを感じ出したからである¹⁰⁰。彼は8月25日、14世紀におけるユマニズム教育の本拠であるナヴァール学寮で説教をおこない、それと名指さぬものの、暗に擁護派に恫喝を加えている¹⁰¹。ただし、ジェルソン自身もまたかつてナヴァール学寮に古典の作品を学んだ独身聖職者であり、オウィディウスやジャン・ド・マン流の好色な女性嘲弄にはしる文学的伝統とけって無縁であったわけではないと推測される。従って、彼にはいうまでもなくピザンと異なる彼自身の視点が備わっているのであって、ピザンのように『バラ物語』後編の女性を愚弄する悪口をことさら問題視することはない。むしろ、教会側の代表者、大学の監督者という立場からジェルソンの取りあげるのは、正統派教義に抵触するとおぼしいいくつかの箇所であった。たとえば彼は、「肉体の恥づべき部分や唾棄すべき罪惡をなんら憚るところなく口にするばかりか、まさに<理性>という人物がそうするように勧めているのだと主張して、ただけしく弁解する者たち」は、自然によって与えられたものはすべて恥じる必要がないと信じた13世紀の異端ペーガル派Bégardsと同じ罪に墮することになる、という点を中心に擁護派の誤りを論じているのである。

また、ピザンの反論書簡(C)のことであるが、当然、役人層にも流布していたものと思われる。というのはピザンは父や夫の生前からパリの上層市民とつきあいがあり、その中にはパリ奉行のギヨーム・ド・ティニョンヴィルGuillaume de Tignonvilleも含まれていた¹⁰²。彼女は翌年2月に、この論争の一件書類と覚書(後出のM)を王妃に献じることになるのだが、同時にティニョンヴィルにも同じものを提出して後見を頼んでいる。従って、おそらく論争の初期から、この方面にも手をまわしていたと考えて差しつかえないであろう。

ところでこの時期、モントルーユが頼みとする盟友コルはパリにいなかった。英国王リチャード二世に嫁いで寡婦となったイザベル・ド・フランスの返還交渉が1400年9月末より始まっており、コルも含めた迎えの一行は1401年4月上旬にパリを発ち、イザベルのパリ帰着は8月10日のことである¹⁰³。Hicksの推測によれば、モントルーユは自分の称揚書簡の反響が予想外にひろがり始めたのを知り、かつは自分に『バラ物語』の読書を勧めた張本人のコルが不在で心細くもあって、この頃、諸方面に釈明・反駁・助力嘆願の手紙を書きまくる。

モントルーユの118番書簡(D)は、「あたかも役所で訴訟をあつかうように、おとといnudius tertius死者(ジャン・ド・マン)に喧嘩を売った」ある法曹家に宛てられている。この人物は、着想のみならず文体や明晰さの点でもギヨーム・ド・ロリスのほうが上だとし、執拗に弁じたてたようであるが、モントルーユはそれ以上には議論の内容に立ちいらず、ジャン・ド・マンをけなすその意見を変えないのであれば、今後多くの人間が「手紙によって、あるいは口論で、あるいは腕力に訴えて」君に挑戦することにな

るだろう、と結んでいる。この法曹家によるギヨーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンとの比較は、ギヨームと較べるとジャン・ド・マンの後編には難がある、という隠健な非難であるのか、あるいは『バラ物語』のすべてをけなしたうえて、そのギヨームの前編にくらべてさえジャン・ド・マンの後編は劣るとする完全な否定であるのか、そのいずれとも決しがたい。ただ、同じ法曹家から反駁の手紙を得たのちに再び書かれたとみられる122番書簡(H)は、相手の議論の詳細を報じぬまま、君の手紙はジャン・ド・マンという偉大な師に対する攻撃の体裁をなしていない、やはり真理の力には抗いがたいものだ、と性急に勝利宣言を述べたうえて、古代教父の例を挙げ、君も誤りはただちに改めるべきである、と結んでいる。モントルーユが多少の諧謔を交えてきわめて気軽に綴っているところから判断すれば、この法曹家はてごわい論敵ではなかったはずである。

119番書簡(E)は、ある「尊敬すべき師父」*reverendus pater*に宛てられている。この聖職者は称揚書簡(A)のことを聞きおよび、それを送付するよう求めてきたらしい。モントルーユは答えて、お求めに応じてフランス語で書かれた私の「駄文」*nugae*をお送りする、ただし、これは余戯のフランス語の文章ではあり、また悪意をもって解釈する人間がいるだろうから、けっして他人に見せないように、と述べている。要するに一種の送り状であるが、さまざまな中傷に対して神経を尖らせているモントルーユの姿が浮かびあがる。

この不安は、次の120番書簡(F)でいっそう明らかに示される。これは、旅先か、あるいは8月10日以降のパリ帰着後のゴンチエ・コルに宛てたもので、何も知らないでいるコルに対し、自分の陥った苦境を訴えることから始める(——自分は「少なからぬ影響力を持った多くの神学者によって」手ひどく痛めつけられた。これ以上自分が論陣を張り続ければ、彼らは自分を異端と宣言することになるだろう)。その後、モントルーユはそれら神学者たちの圧迫について何十行か述べたてるのであるが、ここでも議論の細目は語られず、雄弁で定評のあったラクタンティウスを引用しながら、敵方の頑迷をくどくど嘆くに終始する(——彼らは『バラ物語』を皮相的にしか読みはせず、そのくせこの労作を遊芸の芸人の戯れ歌にも劣ると貶めている)。そして最後にモントルーユはコルに向かい、君の修辞に富んだ反論で早く敵方を蹴ちらしてくれるようにと結ぶ。Hicksは、ここにあらわれる「異端」という語をジェルソンの説教と関連させてとらえ、この書簡の書かれた時点をなるべく繰り下げて8月25日以降としたいようであるが、モントルーユ自身が「多くの神学者」と書いているように、「異端」という語を用いたのはジェルソン一人ではなかったはずで、おそらくは8月25日の以前にもモントルーユに向かってこの語を持ち出した人間がいたものと思われる。しかも文中に、「使いの者 *is baiulus* が君に届けるこの手紙」という文言が含まれているのであるから、しかも、コルの旅先のブローニュ・シュル・メールに行くには英国からわざわざ通行許可証を得る必要がある状況を考えあわせると、この手紙は8月10日以降、バ

り帰着直後のコルに届けられたものと考えるのがよい。

また、この時期に書かれた一連の手紙のうちの残りの一通、121番書簡(G)は、おそらく前の(F)書簡と同じ頃に書かれ、(E)書簡と同一のある聖職者に宛てらるたものであろう。呼びかけこそ「とりわけすぐれたる師父」*pater praestantissime*に変化しているが、それはこの聖職者が前に送られた「幼稚な駄文」*nugae rudimentae*を褒めてくれたことへの感謝と安堵の念を意味するのであろう。この(G)書簡もまた一種の送り状で、「昨晚あなたのお宅でお話ししたところの」反駁文(おそらくは(D)書簡)と、「まだその手許に届けていないが、同僚の一人に宛てて書いた」手紙(おそらくは(F)書簡)とを添えてお送りする、という意味の文面である。それ以上には『バラ物語』についても論争についてもなんら言及はみえないが、この書簡によって、擁護派の陣営には当事者以外にも確実に一人の同調者がいたことが示されている。

4. ゴンチエ・コル対クリスチーナ・ド・ピザン

コルは、9月13日の日付けで、初めてピザンに手紙(I)を書いている。相手をいきなり *tu* で呼ぶ以外⁴⁰、きわめて隠やかな文章であって、おまえは「近ごろ新しく誹謗文書 *invective* の体裁で」ジャン・ド・マンの作品を攻撃した文章を書いたそうだが、よく検討してみるために自分にもそれを送ってもらいたい、と依頼する趣旨の書簡である。注目すべきは、コルが相手をピザン一人とは考えていなかった点で、この手紙の末尾近くには、「この論争にあえて自分では手を出さず、また手を出せないために、おまえをけしかけ、おまえを雨避けの外套のように用いて、たかが一人の女よりも蔭にいる自分のほうが力があることを匂わせ、また(女を用いたほうがジャン・ド・マンの)評判をいっそう貶めることができると考えている、おまえの周囲の人間たち *satalites*」を揶揄する部分がある。

この二日後の9月15日の日付があるピザン宛の第二の手紙(J)で、コルの口調がにわかには尊大なものに変化してしまうのは、やはり反論書簡(C)の内容に接したためと解するべきなのであろうか。コルはまずピザンに対し、「おまえは女だてらにこの問題にのぼせあがってしまったが、自惚れ、あるいは思い上がりのせいでそのおまえが見舞われた狂気、ないしは錯乱を」悔い改めるようにと求める。「聖書について非のうちどころのない傑出した博士、高遠な哲学者、自由七学芸のあらゆる分野に精通した碩学」であるジャン・ド・マンに楯つくこと自体が間違いなのである。ただし、コルはそれ以上にはピザンの掲げる論点に触れようとならないのであって、「この著者についておまえが書きあらわそうとした、こう言っては失礼だが、誤った書簡を論駁するために私が筆をとるその前に」、どうかみずから過ちを認めるように、と繰り返すばかりで手紙を終えている。

おそらく9月の下旬に書かれたと推測されるピザンのゴンチエ・コル宛て書簡(K)が残されている。コルにしてみれば彼女の能力を過少に見積もり、脅しをかければただ

ちに問題の片はつくと考えたのであろう。その結果、二通の手紙(I,J)ともにピザンが女性である点をからかい、揶揄しているが、ピザンが見過ごすことのできなかったのもまさにこうした男の態度であった。彼女は言う、「女性は生まれつきのばせあがりやすく、狂気や錯乱につき動かされて高遠な博士まであえて非難しようとする、とあなたはおっしゃるが、私がその女性である点を咎め立てて」あなたはさらに第二の手紙(J)を書いた。むしろあなたは、私が反論書簡の中で挙げていた条々を神学的に検討し、それが肯定できないのか否かを論理的に弁じるべきであった。ピザンが続けて歴史上の、あるいは当代のすぐれた多くの女性の存在に言及するあたりからは、議論の具体性と精密さの上で、正規の学業を終えた高級官僚であるコルを女の自分のほうがむしろ凌いでいるという自信がほの見えているし、また特に「至高の神学的な方法によって」*selon voye theologienne la plus souveraine*と注文をつけているのは、8月25日のジェルソンの説教による介入に勢いづいたせいでもあろう。

この書簡(K)の前半部は、アンチフェミニストに対する批判という意味でジャン・ド・マン攻撃の体裁をなしていたが、後半部はより具体的な形で『バラ物語』を難詰している。彼女は言う、「この『バラ物語』と題された作品には、もちろん素晴らしい箇所もあるが、しかし、前にも述べたように、その美質が真正のものであるだけに、危険もますます大きいのであって、人間の本性はより多く悪に傾きやすいのであるから、この作品は、きわめて厭うべき風俗に人をみちびく邪悪で背徳的な勧誘となりがちである」。先に反論書簡(C)の末尾にみえた⑦の論点が、ここではいくぶん発展した形であらわれている。

また、多くのすぐれた女性実際に存在するという指摘は、以後、ピザンの『バラ物語』攻撃の論点の一つに加えられることになる。もちろん、この指摘は、たとえば<嫉妬深い夫>が述べる女性嘲弄を、実例を掲げることによって現実的には真実でないと立証しようとする意図のもとになされている。論争後の1405年になってあらわれた『三つの美德の書、あるいは名婦の都』では、オウディウスの『恋の技法』、チェッコ・ダスコリの『アチェルバ』、アリストテレスの筆に擬された『女の秘密』など女性嘲弄の文学が槍玉にあげられた後¹⁹⁾、古代神話、聖書、古典作品、歴史上の名婦、同時代の婦人などから実におびただしい数の貞操堅固な女性の実例が列挙されているが、これは論争中からの彼女の、この方面についてのなみなみならぬ精査のほどを示すものであろう。すでに反論書簡(C)に見られるように、ピザンは『バラ物語』論争を通じて、作品構成上の真実と現実世界の真実との間に区別を設けず、登場人物の言説を日常の人間の科白と等身大の判断基準で裁く。きわめて幼稚な態度にみえるけれども、そうとばかりも言えないのは、結局のところ擁護派も、作品自体の価値という概念をたゞ漠然とした形で把握していたにせよ、現実的価値との区別をついに明言するにいたらなかったからである。つまり、それがこの時代の作品受容の水準であったわけで、彼らはピザンと同じ観点から作品を弁護することを余儀なくされ、そのため、題

材を入念に準備する上に文章でも執拗な構成力を誇るピザンを、議論のレベルではけっして凌駕できないであろう。

ゴンチエ・コルは、中途半端な応酬の後、論争の舞台から身をひいてしまう。彼はじつは第一の手紙(I)の末尾で、自分は今まで多忙で意見を述べられなかったが、今後はどれほど忙しくても必ず反論を書こう、とピザンに確言してあった。もちろん、英国との交渉のことに言及しているのであるが、しかし、パリ帰着後、いよいよ彼女との間に論戦が始められようとしたところで、10月始め、御用金裁判所 Cour des aides の定員4名の管理官 général の一人として任命されたのである⁽¹⁶⁾。彼はこの後1404年頃、会計院の総裁 trésorier に転じ、1408年までは対英交渉の使節にも加わっていないことから推測できるように、おそらくは経済官僚として多忙な日々を送ることになるであろう。ピザンの(K)書簡以後、論争はうやむやのうちに終息したかにみえた。

5.反『バラ物語』派の凱歌

1402年2月1日、ピザンは9月のコルとの論争を中心として書簡をとりまとめ、献辞ならびに事情を記した解題(N)を付して、王妃とパリ奉行のティニオンヴィルとに一件書類の形で提出する。9月から2月までの期間の年表上の空白は、ほとんどすべての研究書にみられる論争経緯の略述では、ごく単純に擁護派の沈黙と解釈されているが、註(1)でも触れたように、この期間をあつかう資料はピザン自身の手で用意されたものであり、擁護派からの有力な反撃が記録上は抹殺されてしまった可能性も強い。

ピザンがこの時期に有力者に書簡集を献呈したのは、いったいどのような意図によることであったのか。自分の勝利をパトロンに報じるためであったのか、それとも、あるいはその反対に、擁護派からの圧迫に耐えかねて援助を乞おうとするためであったのか。解釈の鍵を握るのは、もちろん王妃宛献辞(L)とパリ奉行宛献辞(M)である。しかし、献辞特有の不透明な表現に隠されて明瞭な形では浮かびあがってこないが、子細に検討すればこれら二つの献辞には微妙な差が認められ、その隙間から、この時点でのピザンの真の意図が垣間みられることになるであろう。

まず王妃宛献辞(L)では、折にふれて報告されていたからであろうが、前後の事情の説明なく書簡集のことに話がおよぶ。「私はか弱い能力をもって、淑徳にもとるさまさまの謬見に対し、文字通りの防戦によって女性の名誉と女性への賛辞を守ろうと努めたのですが、その私の努めと願いと望みとを、これらの書簡の中に御理解していただけます。この名誉と賛辞とを、多くの学者をはじめとする方々が文書によって貶めようと躍起になったのではありますが、実に耐えるのも守るのも容易な仕事ではありません」。これに続く部分でも、論争に関してはすべて過去形が用いられ、全体として、苦しい戦いでありながらも女性の名誉を守りきったさまを高覧に供するという趣旨は明らかである。

ところがティニオンヴィル宛献辞(M)では、まず当該の論争のことが「厳肅な人達

の間の相異なる見解によってもたらされた、雅びやかで憎しみのこもらぬ論争」*debat gracieux et non haineux*と規定されている。ピザンはついで、添付した書簡をよく検討して自分の意見の正当性を理解するよう願ってから、以下のように続ける。「私が女で無知である *ma femmenine ignorance* 点に御同情くださったうで、あの高名でひいでた先生方であらがる私にとって、あなたのお知恵が力となり助けとなり守りとなり支えとなるよう、先に申し上げた私の正しい意見に、憐れみの心をもってかたじけなくも御同情ください。実はあの方々の精妙な議論は、私は支えるすべを知らなかったものですから、すぐにでも私の正しい抗弁を打ち砕くところだったので」。さらにピザンはもう一度、「あの方々のおおいなる能力と私のか弱い能力(の懸隔)に鑑みて」自分に同情するよう頼みながら献辞を終える。この中には王妃宛献辞にみられる勝ち誇った様子もなく、むしろピザンが防戦一方で、論争は決着をみぬままなお続きそうな気配であり、そのために助力嘆願の調子はいっそう切実となっている。また、これはピザンの自己矛盾ともなることであるが、*femmenine ignorance* 「(直訳すれば)女性としての無知」という具合に、女性一般が無知であることをあっさりと認めて、男から無用の反感を買うのを避け、かえって同情をひく文面を作り出そうとしている。これは単なる謙遜の辞ではありえないであろう。

王妃宛献辞からは激しい論戦を勝ち抜いた凛々しい女戦士というイメージが浮かびあがり、それは女性を中心とする王妃側近には好ましく映じたにちがいない。ましてピザンには文筆で暮らしを立てるといって、女性としてはほぼ前代未聞の切迫した欲求があり、そのためには多少宣伝臭がつきまとおうとも、文学的パトロンである王妃の前で自分の活躍をよりはなばなく飾る必要があったと思われる。一方、ティニョンヴィル宛献辞は、あたかも訴訟書類でもあるかのように冒頭に大仰な言葉づかいで擁護派の人名・職名を列記している。つまり、これが男性社会に宛てられたもので、男性対女性の微妙な争いにおいてあえて男から好意と援助を求めるといふ目的は、ピザン自身によって十分に意識されていると考えられる。従って、この献辞(L)は作為にみちた修辭的な虚偽をも含むことが疑われてしかるべきであり、ピザンはそれまでの論調に反して女性一般の無知を強調し、その延長線上で、自分をただけしくみせないために、論争を「雅びやかで憎しみのこもらぬ」ものと呼び、女性らしい穏やかさを見せかけたにちがいない。それにもかかわらず、擁護派からの攻撃がなおも意地悪く執拗に続いているように読みとれるのは、ピザン一流の修辭的効果のゆえであって、ティニョンヴィルの同情をひくためと解するのが自然であろう。

結局のところ、王妃宛献辞の内容をいくぶんか割り引きしてとらえ、ティニョンヴィル宛献辞のほうは、これが有力者の庇護を得るために書かれたという動機のみを留意すべきである。つまり、王妃宛献辞にみられる勝利の意識はピザンの実感であったろうが、それでも彼女にはこの勝利をいっそう確実にするため、たゆまず、より広い層にわたって自分の勲を宣伝する必要があったということになる。

実際、1402年のピザンは、当時の一流の知識人・官僚とわたり合って得た地歩を維持するために、きわめて精力的に文学活動に専心している。彼女は2月14日、聖ヴァレンタインの祝日を期して『バラの譜』と題する韻文作品を公けにするが¹⁷⁾、これは女性と恋愛を賛美する「バラの騎士団」の(おそらく彼女の創作による)創設を歌ったもので、なによりも「バラ」というこの騎士団の紋章自体が、『バラ物語』擁護派へのあてつけとして機能している。さらに6月23日、彼女はそれまでの作品をとり集め、最近の論争書簡集までもを組み入れて個人作品集を作り、王妃に献呈している。夏至に近い洗礼者聖ヨハネの祝日(6月24日)の前後には、宮廷で夏の祝宴が催されることが多かったが、これはそうした宣伝効果の大きい機会を選んだピザンの計算と考えるべきであろう。

6. 静かな進行

1402年5月18日、それまで沈黙を守っていたジェルソンが、満を持した形で彼の体系的な反『バラ物語』論(O)を公けにした。

なぜこの時期になって彼が突然反論を書かねばならなかったのか。年表は空白のままにとどまっているが、ピザンの宮廷での凱歌をよそに、擁護派の活動はなお続いていたと考えなければならない。その一端を窺わせるのが、モントルーユのある詩人宛書簡(P)である。Hicksによれば、宛先はオノレ・ブシェ(ボネ)あるいはユスターシュ・デシャンで¹⁸⁾、年表上の擁護派の空白期を埋める唯一の資料ということになる。モントルーユはまず、ジャン・ド・マンに楯つくというピザンの行為自体を非難し、アリストテレスの弟子テオフラストスに異議をとなえた高級娼婦レオンティオンに彼女をたとえる。ついで、反対派の論拠を概括し、<理性>の科白は(たとえば公然と性器の名を口に)し<理性>の尊厳を損なう、<嫉妬深い夫>の科白は(女性に対する)侮辱に満ちている、最後に、<恋人>は(その若い日のバラを摘むという行為を)あまりにあけすけで淫奔な言葉で述べている、という三点を挙げる。その後モントルーユは、これらの論点に対する反撃として、登場人物の多様性 *varietas* という問題をとり上げ、「どのような情念や感情によって登場人物が動かされ導かれ、また、どのような目的で話しているのかを反対派は理解しない。また、この師(ジャン・ド・マン)がはたしているのは諷刺詩人の役割であって、これに鑑みれば、他の著作家には許されない多くのことが彼には許されているのだ、ということも理解しない(II.24-28)」と主張する。反対派の多くは拾い読みをするだけだが、「注意深く読んだ者でも、(作品の)真意 *rei misterii* を理解することがほとんどできずにいる(II.40-42)」し、さらに理解できた者も、職務上の要請などから意に反して反論を述べ続ける。モントルーユは最後に、この詩人に対し助力を嘆願して手紙を終えている。

反対派の論拠として示される三点はすべてピザンの反論書簡(C)に挙げられているもので、(①、③、および⑥)それ以外に新しい論点はない。ただ、注目すべきは擁護

派の主張のほうで、この書簡(P)において初めて、他の著作家には許されない諷刺詩人の特権が主張される。また、登場人物の科白についてもすでにピザンが触れていたが(③)、登場人物の科白だから作者に責任はないとする論争当初の擁護派の見解から一歩進み、登場人物の行動の意図・目的に合致している場合には何でも語らせることが許されるとする、おそらくは物語の構造や文脈の観点によりやく目覚めた主張への移行が窺える。こうした考えは、1401年の7-8月のモントルーユの書簡には見られなかったもので、この書簡(P)を時間的にジェルソンの反論の前に置くにせよ、置かぬにせよ、擁護派が論争によって論拠の再検討を迫られた事実を物語るものであろう。

ジェルソンの反『バラ物語』論(O)は、この擁護派の新たな動きを考慮に入れたものであったと考えることができる。モントルーユは手紙の中で、作品の隠された意味を理解してもその職責上反対せざるを得ない人間に言及していたが、あるいはその時、ジェルソンのことを暗に仄めかしていたと思われるふしがある。

実は、この反論もまた『バラ物語』と同じく寓意人物の劇として構成され、しかも、語り手の<私>には「ある朝、いまだよく目覚めぬうちに、私の軽やかな心はさまざまの思考の羽と翼の助けによって、キリストの教えの聖なる法廷にまで飛び上がったように思われ(II.1-4)」る。つまり、同じく夢物語という形式が採用されているのである。聖なる法廷では折しも『バラ物語』の裁判がおこなわれるところで、予審判事役の<良識>Conscienceが、<(狂恋の)恋人>Fol Amoureux⁽⁹⁾に対する<淑徳>Chasteteからの告発状を読み上げる。それによると、<恋人>は若い娘たちから羞恥心を奪い、また<老婆>の説教により売春を勧めた。<嫉妬深い夫>の述懐により、女を貶め、若者を結婚から遠ざけた。巧みな言葉により<愛欲>Venusの火をいたるところに広めた。また瀆聖の罪も重く、肉体の快楽を勧め、さもないと天国に行けぬと教えた、等、この告発は10ヶ条におよぶ(II.43-117)。一見して明らかのように、これらはピザンの反論書簡(C)の論点の①-④、および⑥と対応し、それらと同一であるか、ないしはその変形であって、すべて道徳にもとづいた議論である。おそらくジェルソンの意図は、論争の第一段階における反対派の論拠をここで列挙することにあつたとおもわれる。

この後、<淑徳>の告発に対する反論が傍聴に集まった「数知れぬほどの人の群れ」からわきおこる(II.127-171)。つまり、これが擁護派の主張をあらわすのであるが、まず、『バラ物語』においては<恋人>の若い頃の行為が問題となっているのであり、彼は後に悔悛しているのだから許されるべきだ(——おそらくは伝ジャン・ド・マンの作品『遺言詩』に対する言及であろう)。その雄弁、美文、百科全書の知識は類をみない。また、『バラ物語』は登場人物の言説による書物 livre de personnagesであり、各人物はそれぞれの役割に応じて話して不都合はない。<理性>が性器の名を口にしたからといって、名自体は卑猥ではなく行為のほうが罪深い。全体として、この物語には悪い点より良い点のほうがはるかに多い。以上が群衆の主張の概要だが、これもまた論争の第一段階における擁護派の論拠を列挙したものとして読める。「これらの言葉によ

て、<恋人>を支持する人々には、この訴訟はもはや相手方が答えることができないのだから、勝ったようなものだと思われた(II.172-175)]。

するとそこにジェルソン自身を思わせる<神学的雄弁>Eloquence Theologienne(ただし女性)が登場し、新しい論拠を示して反撃することになる。彼女はまず、すでに死んで久しく、そのため法廷にも姿をみせることができない<(狂恋の)恋人>、すなわち作者ジャン・ド・マン自身と考えられる物語の一人称の語り手を断罪するが、すぐに名ざして矛先をその<恋人>の擁護者のほうに転じる。つまり、ジェルソンは、それまで両派ともに混同していたジャン・ド・マンへの賞賛あるいは非難と『バラ物語』へのそれとを明確に区別し、今後はジャン・ド・マンの権威から離れて作品をとらえ、その作品を賞賛すること自体の意味を検討しようとするのである。この新しい提案の効力が擁護派の人々にも十分に理解されるよう、<神学的雄弁>は演説末尾でこの区別をもう一度繰り返すことになるが、論争の推移を見守っていたに違いないジェルソンのたくみな戦略であった。まず第一の条項によって、『バラ物語』の作者の定評ある学識を冒瀆するのはけしからぬとする擁護派の論点は、一瞬にして議論の外に出されてしまう。また第二の条項によっては、たとえば性器の名を口にするものの是非について、これまでさまざまなレベルの論拠を混同してはてしなく続いた論戦も、すぐさま意味のないこととして切り捨てられてしまう。

こうして篩にかけた後でジェルソンが取りあげるのは、ピザンの反論書簡(C)において整理した論点に即していえば(第三節を参照)、③の登場人物の科白と⑦の美しいだけにかえて危険の増す書物という二点である。<神学的雄弁>は、登場人物の科白をすべて無制限に許されるものだとは考えない。善悪の判断はその内容によるのであり、瀆聖の言葉をたとえば異教徒という登場人物に語らせるのは、実際に異教徒を連れて来てじかに語らせるのと同様に好ましくない。いや、むしろ語らせる者の意図が秘め隠されている分だけ前者のほうが悪質である(II.314-404)。ここから第二の論点に移ることになるが、『バラ物語』の危険は、まさに作品の面白さや美しさの中に若者の廉恥心を損なう毒を秘め隠した点にあり、さらにその上、登場人物の科白という隠れ蓑を着せているのはきわめて性悪である(II.405-547)。<神学的雄弁>は、この種の作品の悪徳はすでに昔から論じられてきたとして、論証上の権威となるケクロや古代教父の言説を掲げて擁護派の反論を封じてしまう(II.548-608)。

この後、<神学的雄弁>は『バラ物語』がはらむ問題点を具体的に指摘するのだが、さすがにジェルソンの論証はよく整理がゆきとどき、たとえ『バラ物語』の持つアイロニーの面白さを一切無視する議論だとはいえ、作品を批判するのに作品の外にある要素を持ち込むことはない。しかもモントルーユの(P)書簡にみられる擁護派の新しい登場人物論にもある程度は通じていたらしく、反対派としてそれをふまえた反論を提示する形になっている。すなわち、モントルーユは物語の枠組み内における動機や目的、つまり文脈というものの重要性を指摘し、その観点から各登場人物の言説が正当

化されうると主張したのであるが、これに対して<神学的雄弁>は、まず第一に、言説の内容とそれが語られる相手とが齟齬をきたしていると述べる。性器の名を口にするとしても、たとえば原罪の問題を熟知するところの神学者と論争するためなら、いっこうに差し障りはない。ところが『バラ物語』で<理性>は恋に狂った<恋人>にその名を述べるのであって、これでは彼のよこしまな欲望をからかい、刺激するだけの効果しかない。また第二に、<神学的雄弁>は、語る登場人物とその言説の内容とがそぐわないとも述べている。たとえば無分別な生殖を勧める<自然>や<ゲニウス>が、その権限もないのに天国と信仰について御託をならべる。<理性>や<淑徳>が<愛欲>以上に淫奔な話題を好んで持ちだす(II.609-656)。つまり登場人物とその言説、また言説とその聞き手との適合性を問題にしたわけであり、擁護派の示す物語内の文脈という観点そのものに立った反論を提示したといえることができる。

この<神学的雄弁>の弁論の後、語り手の<私>は判決を聞く前に目がさめてしまう。ジェルソンは『バラ物語』の骨法を換骨奪胎してみずからの反論に適用しているのであり、ゆきとどいた研究ぶりが窺えるのだが、実はまさに、道徳論ないし正統派教義の観点からみて登場人物とその言説とその聞き手とが齟齬をきたすというその点にこそ、『バラ物語』の魅力の一つが隠されているのである。それを申し立てるのは本稿の役割ではなく、モントルーユ以下の擁護派の仕事であるべきだが、彼らはけっしてその論点にたどりつくことはないであろう。先回りをして言ってしまうと、ジェルソンの反論(O)は、論証はそのままにして立脚点のみを逆転させれば現代の『バラ物語』理解にごく近い地平にたつするという意味で、この論争における作品批判のもっとも高い水準を示したものといえよう。けれどもどうやら擁護派には、作品受容および表現能力の両面にわたって時代を超えていたジェルソンの反論の効力が把握出来なかったらしい。

7.最後の挑戦

こうして、手紙の応酬はなくとも、両派はいわば水面下で議論をみがいていたのであった。すると突然、おそらくは1402年も夏の終わりになって、ゴンチエの弟のピエール・コルがピザンに長文の書簡(Q)を送り、論争が再開された。

ピエール・コルも触れているが、ジェルソンの寓意的反論(O)は匿名で流布した。書簡(Q)は、明らかにピザンの反論(C)とジェルソンの反論(O)とを眼前に広げ、双方から適宜論点を抜きだしては、それに反駁を加えるという形で構成されている。ピエール・コルの口振りからすれば、反論(O)の作者がジェルソンであることはすぐに知れ渡ったようであるが、匿名である以上コルとしては自分の反論を彼に送ることができず、それでジェルソン宛ての反駁もこのピザン宛ての書簡の中に含まれている。

ただし、反論(C)と反論(O)はほぼ一年を隔て、すでに述べたようにその間の論点の変化は大きい。コルには、論争の推移という視点が欠けているので、もはや乗り越え

られた解決済みの問題にも拘泥し、かつ議論は執拗で瑣末にかかずらわって大局を逸する傾向が著しく、そのため書簡全体の論旨はきわめて曖昧なものになっている。それはたとえば、ピザンの反論(C)の論点(第3節を参照)の①、<理性>が男性性器の名を口にするという問題を論じる部分を見れば明らかになるだろう。ピザンは「名ではなく、事物自体が汚れの原因となる」と述べたことがあった。この点についてのピエール・コルの議論は、ジェルソンの反論に接しているはずであるのに、次のように進行する。まず、幼児の性器はどう呼んだらよいのか。これもその名で呼ばないとするなら矛盾が生じる。幼児の性器はまだ汚れがないと考えられるからである。もし、原罪の後ではすべての人に汚れがあるとするとするなら、アダムとイブその人自体にも原罪後は汚れが生じていることになり、彼らをその名であるアダムとイブと呼べなくなってしまう(II.62-87)。男性性器の名は聖書にもあらわれる。さらにイエスも有していたはずであるが、(汚れのありようもない)それを何とよぶべきか(II.259-269)。フランスでこれを名指さぬのは、実はたんに習慣によるのである。フランスでも、女性同士の集まりでは女性が女性性器の名を憚らず口にしていないではないか(II.274-285)。ジャン・ド・マンはいつも性器の名を直接用いるのではなく、必要な場合に限られるのであり、それ以外のたとえば<友人>および<老婆>の科白中では、その場に応じた言い換えをおこなっている(II.316-325)。ピエール・コルにとっては、性器の名を口にすることも必要な場合には許されるという結論に達するために、めまぐるしく話題を転じながら、これだけの議論を要するのである。

また、ジェルソンの反論に相対した時も同様であって、登場人物論の新しい局面をモントルーユ書簡(P)と反論(O)の双方について把握できず、ホラティウスの『詩論』以来の、登場人物はそれらしく描くべきだという理論をそのまま繰り返す(II.402-)。その一方で、<恋人>の行為の道徳的是非という、ピザンの反論書簡(C)以来の乗り越えられなかった問題を、たとえば恋をしたことがないはずのジェルソンが<恋人>の行為を論じられるか、と攻撃しながら長々と論じ続けている。

しかし、ピエール・コルはその一方で、それまでこの論争で扱われたことのなかった論争法と論点とを、新たに提示しているようにも思われる。まず、新しい論争法とは、論争の対象から直接抜きだされた引用による論証のことである。もちろん、これまでも論争書簡の中には多数の引用がなされていたが、それらは論証上の「権威」*auctoritas*として引かれたのであり、中世の修辞学が教える論証法に準拠しているのである。つまり、スコラ学が聖書・古代教父・アリストテレスを、法曹家がローマ法・王令を引用して議論の正当性を権威付ける必要があったように、擁護派も反対派も、『バラ物語』を論じるのに聖書やキケロなどからの引用を論証上の「権威」として用いたのであった。もっとも、そこに引用される「権威」は、ある方面の「権威」たるの当然の帰結として、議論の各分野ごとに明確にその名を指定されているわけであり、これを反対からいえば、どの「権威」を引用するかによって、その議論がどの分野のものである

かが限定されることにもなる。従って、たがいに效能のおよぶ範囲をたがえた聖書とキケロからの引用が混在した点から判断すると、この論争が従来のスコラ学や法律論のいずれの枠組みにもおさまりきらぬものであるということだけは、たとえおぼろげにはあれ、当初から論争当事者によって認識されていたと考えてもよい。しかし、多くの場合、この「権威」は手短かにまとめられた命題の形をとるが、原典の文脈から切り離されて抽出され利用されているのであり、原典からその権威ある著者名をもたらすのみで、内容的には当該の論証中にすでに述べられた議論のレジュメとしてしか機能しない。ところがピエール・コルは、『バラ物語』を論じる議論の中に当の『バラ物語』からの詩句を引き、「権威」の引用の場合と違って、その詩句の内容を敷衍し発展させる作業を通じて自分の議論を正当化しようと試みると同時に、また、それによって、どこまで意識的であったかは別の問題として、この論争がスコラ学とも法律論とも異なる文学論争である点を明確にしようと試みしたのである。

これが新しい、従って困難をとまなう作業であった次第は、Hicksの『資料集』にして約800行という長文の書簡中の、引用による論証箇所を順にたどれば理解されるだろう。始めピエール・コルは、相手の議論の間違いを指摘するために引用を用いる。ジェルソンの反論(O)は<狂恋の>恋人>を非難していたが、実は当の『バラ物語』以上にこの(理性を失った、よこしまな)狂恋を告発しているものはないとして、コルは8個の引用を列挙する(II.142-160)。すなわち、「まさに(愛)神がすべての人をまどわせる(『バラ物語』¹⁰、v.4342)」、「心を燃え上がらせ焼きつくす狂恋から、恋人たちがどうか身を守るように(vv.4593-4)」、「恋をもっぱらとしすぎる者は、それだけ後になって後悔する(vv.10125-6)」などであるが、すべて短かく、登場人物のうちの誰がどのような状況で述べたものかという指示もない。実は前二者は<理性>の、後者は<富>の科白から抜きだされた詩句で、それぞれの発言の意図が異なるはずであるのに、その説明もなく、いわば裸の形で並びたえられるだけである。つまり、論証上の「権威」とほとんど同じ扱いで引用されているわけだが、しかし反対派の目から見れば、当の<狂恋の恋人>、すなわち作者ジャン・ド・マン自身が被告の立場にあるので、引用はそれだけ簡単に「権威」の有するべき論証上の効力を剥奪され、たんに恣意的な弁明ないしは証言としてしか機能しない仕組みになっている。そして、コルの引用の新しい形式を前にしたピザンの理解は、この段階にとどまることになろう。

しかしその後コルは、『バラ物語』からの引用にはかならず発言者と発言の状況とを付け加えるようになる。たとえば、<理性>が男性性器の名を口にする問題について、<神学的雄弁>は誤った先入観によって告発していると反撃する箇所だが、コルはまず、「もし何度にもわたって読み、また読み返すならば、[...]この物語を賞賛し、評価し、愛好し、尊敬することだろう。<理性>の述べる言葉をどうかよく御覧いただきたい(II.232-5)」と断りを入れる。ついで、「友よ、善でしかありえぬものは、なんら悪評をこうむることなく、まさしくそれ本来の名によって、たしかに呼ぶことができるの

だ。さらに悪についてもまた、それ本来の名で語ることができる(vv.6945~50)」という箇所を引き、それをもとに、「彼(ジャン・ド・マン)は、性器の名を語るべきだとではなく、語ることもできるとのみ言っている。べきだと、できるとは同じことではない(II.242~3)」と、コル自身の考えを述べ始める。ここにいたって原典の文脈というものが意識されたうえで詩句が選び出され、それもたんなる断片的な証言としてではなく、議論の展開に弾みをつける踏み台として導入され、しかもなくてはならぬ場所に象眼される。つまり、引用の手順と役割とが、「権威」の場合とはまったく相違しているのである。

ただし、ピエール・コル自身はどこまでこの新しい方法に自覚的であったのだろうか。ある意味では、擁護派の持論の延長線上に得られた偶然の成果であるとも疑えよう。モントルーユの書簡(F,P)で述べられていたことであったが、反対派が作品をよく読みもせず攻撃している、というのが擁護派の一貫した嘆きの一つであった。コルは書簡(Q)の末尾近くになって、ようやくこの新しい方法の特異性についてみづから気づくにいったようで、<ゲニウス>の科白から引用するにあたって注意書きを加えているのだが、出発点ではその擁護派の嘆きを彼もまた抱いていたことが明らかにされる。つまり、「各人が『バラ物語』を読んでいるわけではないので、私はこれから<ゲニウス>の言葉そのものを引用しよう。私がこれまでも作品からの言葉そのものをあまりに多量に引きすぎたというなら、どうかお許し願いたい。二つの理由のために私は引用をしたのだが、まず一つは、作品の中にあることを喋っているとと思われるからである。というのも、上に述べたように、まったく読んでいない者も多い(II.675~681)」のである。しかし、以下に続く部分は、コルがこの(Q)書簡の中で引用を重ねながらじょじょに新しい手段の役割に覚醒した次第を、言葉たらずながら物語っているように読める。「もう一つの理由とは、ジャン・ド・マン先生が響き豊かな韻文で語ったようには、私は散文で手際よく語ることができないからである(II.681~3)」。コルの飽くことを知らぬ長文の論証から判断すれば、彼がこの箇所ですらにわかに簡潔性を心がけるはずはないのであって、「手際よく語ることができない」という表現も、字句通りに受け取ることはできなくなってしまう。コルは手際のよさという議論の紋切り型の要請に引きずられているのであり、むしろ、ジャン・ド・マンと同様には巧みに語れないとする前半部のほうに力点がある。末尾に近づくほど一つの引用ごとの分量が増加する点をも考えあわせると、彼は、ここにいたるまで擁護派がまだ明言したことのなかった、原典の詩句の動かしがたさといった問題について、きわめて控えめな形ではあるが触れているように思われる。つまり、「権威」としての呪縛や証言としての効力を目的とする引用ではなく、作品を作品自体によって語らせるための引用の姿が目指されているのであり、そのためにも、コルは『バラ物語』をより精密に読解する必要にせまられたことであろう。

ところで、先に書簡(Q)の中には新しい論点が提示されていると述べたが、それもこ

の新しい引用の実践と無関係ではありえない。ピザンの反論(C)の趣旨は『バラ物語』が不道徳の書だということであった。コルの新しい論点とはこの非難に答え、ジェルソンの反論(O)が試みた議論の転回にもある程度まで対応しながら、むしろ積極的に『バラ物語』が教化の書であることを証明するものである。あるいはモントルーユが書簡(P)の中で簡単に触れた「(作品の)真意」を具体的に示すものとも考えられるが、いずれにせよコルによれば、教化の書として読むためには精密な読解が要求される。「この本をよく読み、さらにいっそう理解を深めるためにしばしば読む者は、悪徳を避け美德にしたがうための教えを見出すことになろう(II.471~4)」。そしてコルは、<嫉妬深い夫>の「行い正しく生きる者が、地獄に墮ちることはない(vv.9011~2)」という科白や、<理性>の「恋の娛しみを追いもとめる者が、いったい何をしでかすか御存知か。哀れて愚かな奴隷のように、あらゆる悪徳の魔王に身をゆだねるのだ(vv.4425~8)」という科白以下、5個の引用を続けている¹⁹⁾。

ただしコルは、おそらくピザンの反論(O)に引きずられて別の議論に移ってしまい、ふたたびこの論点に戻るのには百行も経てからのことである。コルによれば、反対派が口を揃えて罵る結末のバラを摘む部分も、あらかじめ女性たちに男の術策というものを教え、防衛法の手がかりを与えるという効能を持つ。なぜなら、オウィディウスの『恋の技法』はラテン語で書かれており、従って男性読者のための女性攻略法と考えられるが、『バラ物語』はフランス語で書かれており、女性でもこれを読むことができる(II.552~71)。この部分まではジェルソンによる議論の転回にむしろ積極的に応じ、『バラ物語』を擁護することの意味を論じていると評価されよう。しかし、本節の冒頭に述べたようにコルはやはり論争の大局を把握しておらず、この論点を集中的にあつかって発展させる機会をのがし、その後、話題に応じてきざぎざにしか触れていない。もちろん論証においては数個の引用が掲げられ、一見したところ、それらの引用は原典の文意を保存した形で引かれてはいる。たとえばコルは、<老婆>が<歓待>に対し、お前が男に欺かれぬよう私は教えようと断っている箇所を引き(II.605~17)²⁰⁾、さらにまた、ジャン・ド・マン自身が作者として、自分は女性を侮辱する意図を持たないと声明している箇所を取り出して(II.742~67)²¹⁾、『バラ物語』の教化的意図を主張する。こうした論証は文脈を尊重した引用をともなって、たしかに説得力を持ってはいる。おそらく、擁護派のたどりついた最も精緻な議論と評価することも可能であろう。しかし、ピエール・コルには論争の移りゆきという視点が決定的に欠けているのであって、すでにジェルソンが登場人物論にことよせて提示した、物語の構造自体にもかかわる新しい問題に対する配慮はみられない。すなわち登場人物とその言説、また言説とその聞き手との適合性の観点に立てば、上の二つの教化の例は、<老婆>やジャン・ド・マンという、教育に携わるには不適切な人物によって語られているとして、すぐさま反対派から一蹴されてしまうことになろう。コルが自分の提示した新しい論点の有効性を十分に理解していたのか否か、と疑われてしかるべきところである。『バラ物語』にとって

ジェルソンの登場人物論のもつ意味は、こうして擁護派にはついに理解されないままにおわった。

8. 拒絶と脅迫

ピエール・コルの(Q)書簡に対し、ピザンは10月2日という日付のあるさらに長大な書簡(R)をもって応じている。彼女の今回の議論は徹底して、それぞれの論点ごとに初め(C)書簡の自分の見解を掲げ、ついでそれに対するピエール・コルの反論を引き、最後にその反論に対する自分の解答を述べる、という形式をとっている。これはおそらくピザンの流儀でもあろうし、その流儀に添ってピザン説を掲げてから自説を展開したコルの(Q)書簡を意識しているからでもあろうが、また、その一方で、論争書簡が公開のものであったという事情も大きく関与しているように思われる。つまり、論争の長期化にともなって書簡の流布する範囲が拡大し、そのためピザンは、当初からのなりゆきを知らぬ新たな読者層のことを配慮する必要にせまられたのであろう。

論点の展開される順番が(Q)書簡とまったく一致している点から判断すれば、ピザンが眼前にコルの手紙をひろげてこの(R)書簡を綴っていることに間違いはない。しかしコルが論点の整理もせず、筆の勢いのおもむくままに論じたのである以上、ピザンのこの反論もまた論点整理の機会を奪われ、同じ問題を間を置いて繰り返しかえし論じるように仕向けられてしまった。そればかりか、論争書簡の宿命でもあるが、各論点ごとに自説が優越していることを印象づける必要上、大局の移りゆきには一切注意を払わず、これまで論争中にあらわれたあらゆるレベルの議論を動員して、時に芝居がかり、牽強附会の説となるのをおそれずにコルと対決している。

たとえば一例として、<理性>が男性性器の名をあからさまに口にする、という問題を取り上げてみよう(第7節のコルの議論を参照)。ピザンの今回の新しい回答のみを取り出して順に続ければ、議論の運びは以下の通りとなる。まず、2,3才の子供が原罪の前のアダムと同様に無垢であるか。アダムは原罪と同時に死を背負ったとされ、従って、原罪の以前には不死であったと考えられる。ところで、2,3才の子供は死ぬことがあり、不死ではないから、原罪以前のアダムと同様には無垢ということはありえず、その性器は汚れていることになる。よって、幼児の性器をその名で呼ばないことに矛盾はない。さらに、原罪以後のアダムとイブその人自体の汚れであるが、聖書によれば彼らは原罪の直後、いまだ性器を用いる以前においてさえ、知識と恥を知ってすぐさま腰だけを隠し、目や口は隠さなかった。これはなぜか(II.52-110)。ピザンはこの論点を反問で終えているが、コルに対し、アダムとイブが自分たちの名を隠さなかった以上、彼らをアダムとイブと呼んで不都合はない、と反駁しているのであろう。

ピザンの議論はここで途切れるが、それはコルの書簡(Q)に引きずられて別の論点に移ってしまうからであり、なかば忘れ去られてからこの論点が繰り返される。すなわち、聖書も性器の名を用いるというのが、その目的と方法とは『バラ物語』とまった

く相違し、ジャン・ド・マンのほうでは、恋する男の肉欲の炎を冗談の種にするために<理性>がこの名を口にするのである。また、この名をあからさまに用いる用いないは習慣によるというが、コルは、用いるという習慣自体が良いのか悪いのかという肝心の問題を等閑に付している。しかも、コル自身に、この名を書簡の中であからさまに用いる習慣がないのは意義深い。これは、原罪の直後に腰を覆ったアダムと同じく、自然の羞恥心によるのである(II.224-98)。この部分のうち第一の反論は、あきらかにジェルソンの反論(O)にみえた登場人物論の新しい局面、すなわち、人物と言説と聞き手との適合性の問題の影響下にある。

このようにピザンの議論は、時に論争の最高水準に肉薄し、時に『バラ物語』の文脈を決定的に逸脱して初期の道徳論に戻りながらも、執拗かつ強靱であり、コルの主張は細分されたうえで一つ一つが完璧に論破されてゆく。たとえば、論争初期の段階に後戻りしたコルの登場人物論は、当然のことながら次のように軽く一蹴されてしまう。つまり、もちろん聖書でも悪人は悪人らしく描かれているが、そこには教化的な意図が優先しており、悪人は憎まれるようにおぞましく造形されている。ところが『バラ物語』では、その反対ではないか(II.592-616)。ピザンはここで筆をとどめているのであるが、しかし、この議論もジェルソンの反論(O)の影響下にあることは明白で、悪人の言説の悪が秘め隠されてしまう分だけ、一般の読者にとっては危険だということである。従って、コルが持ち出した新しい論点である『バラ物語』の教化性については、もはやある面では否定されたも同然なのであって、ピザンは次のようにきめつける。つまり、<老婆>は<歓待>に対し、男に欺かれぬために恋の手管を教えると明言しているが、一般的に言って、相手を欺く際には誰でもこうした甘言を弄するものなのである(II.687-784)。『バラ物語』の文脈への配慮は影をひそめ、ピザンは論争初期のように道徳論のレベルでの判断を盾にとる。

従って、この論争の新たな方法論となるべきであった、引用にもとづいて原典を精密に論ずるというコルの提案が、ピザンによって拒否されることは当然であろう。彼女の考えでは、「たしかにあなたは<ゲニウス>の述べる言葉を数多く引用するが、またほかの多くの言葉を無視してもいるのであって、自分に都合のよい言葉をそこかしこから探し求めているだけの話なのだ(II.962-4)」。もちろん、これはコルの引用の恣意性を衝く見解であるとも受け取れるが、反証となる引用句をみつけることはきわめて容易であるにもかかわらず、この箇所でもなら具体的な引用をもって応酬していない以上、やはりピザンは『バラ物語』を離れた一般論のレベルで機転をきかせて反駁しているのである、と判断するのが正しいと思われる。長大な書簡(R)を通じてほとんど引用をもっては反論していない点も考えあわせると、おそらく、彼女はコルの方法の新しさをついに理解出来なかったのである。

全体的にみれば、ピザンはつねに一般的な道徳というものを価値判断の基準において議論を進めている。ジェルソンの反論(O)の論証法に頼ることがあっても、論争の移

りゆきを意識した上で組織的に利用しているわけではなく、たんにそれがある論点を反駁するのに好都合であるからというに過ぎない。一見したところコルの書簡が完膚なきまでに論駁され、従ってピザンの勝利を読者に印象づけてしまうのは、なりふり構わずさまざまの議論を持ち込む彼女の強引な論証力のせいなのである。しかしながら、彼女の論証は初めの(C)書簡と同じ地平から一歩も動いてはいないし、また、『バラ物語』のより精密で正当な評価に導く可能性を秘めていたコル書簡の新しい論点も論証法も、芽を摘みとられてしまった。どうやら『バラ物語』論争にも限界と終局がみえている。そして、皮肉なことに、書簡の末尾近く、ピザン自身がそれを口にするのである。「こうした問題をどうしてこれほどまで議論するのか、私にはその訳がわかりません。あなたにしても、私にしても、見解を変えようという気はないのですから(II.971~3)」。

この後、ジェルソンはパリ右岸のサン=ジャン=アン=グレーヴ教会での12月17、24、31日のフランス語の説教で擁護派を攻撃する。また、日付のないピエール・コル宛て書簡(T)で、ピザン対ピエール・コル論争を総括する形でピザンに圧倒的な勝利を宣言している。注目すべきは、この(T)書簡からは先の反論(O)にみられた文学的な構えや遊戯心が姿を消し、かわりにパリ大学の監督者としての職責という観念が全景を占めていることである。つまり、もはや『バラ物語』についての興味は背景にしりぞき、この作品を擁護する行為のみが問題とされているのであって、判断基準に据えられるものに一般的な道徳と教義上の異端との差はあるけれども、議論のレベルとしては、外在的な論拠を持ち込む初期のピザンの反論(C)に戻ってしまったかのようである。そのため、2,3才の子供が原罪に汚れていない、また、反対派の行いはパル神にひざまづくものである、といったコル書簡のごくささいな言葉尻までがとらえられ、「信仰と良俗の前において異端の臭いがする」と追及される。ジェルソンの文章には豊かなイメージを駆使した異様な凄味さえ漂うのであって、この(T)書簡の末尾では文学論争からは遠く離れ、危険な書物は誰かが告発しなければならぬと脅したうえで、「お前の師(ジャン・ド・マン)の書物がこの世にたった一冊、私の手もとに残ったとしても、さらにまた千リーヴル以上の値がついたとしても、私であつたらそれを売ってまた世にはびこらせるより、むしろ燃え盛る火の中に投げ入れてしまうことだろう(II.195~8)」と述べている。コルに対する明らかな脅迫であった。

さて、論争書簡としては今ひとつ、ピエール・コルのピザン宛て返書(S)が残されている。未完のままであるのは、なんらかの事情でテキストが失われてしまったからとも考えられるが、これがむしろ擁護派自身の編集による文書によって伝承されていることを考慮すれば(註(1)を参照)、その可能性は薄い。さらに文面を検討すれば、未完の理由はますます明らかとなる。その書き出しは一種の遁辞から構成され、お前の反論によってはジャン・ド・マンの批判はいささかも傷つかない、それゆえ先にモントルーユはお前に回答することを避けたし、この私も気が進まない、という意味のこと

が一切の論証を抜きにして述べられている。続いて、ピザンが(R)書簡の末尾で私のようにか弱い者をなぜ攻撃するのかと抗議していた点に触れて、自分(ピエール・コル)がジェルソンの反『バラ物語』論を非難すると、矛盾することだが、お前はどのように高名な博士の説を攻撃するといつて憤激してみたではないか、と綴られたところでこの返書(S)は中断されている。つまり、いきなり具体的な論点を挙げて議論を繰り返る先の(Q)書簡と打って変わって、ピエール・コルは論証以前の人身攻撃に墮しているのであり、おそらくはピザンの反論(R)の容赦ない議論の前に、もはや応答できなかったものと推測されよう。「気が進まない」というのも、これ以上は論争を進展させる能力を欠いているという自覚の、裏返しの表明であつたに違いない。

この未完の書簡が象徴するように、『バラ物語』論争は、なかば強いられた擁護派の沈黙のうちに幕切れをむかえた。

9. 擁護派の論旨について

Badelが述べるように、『バラ物語』論争は「饜の対話にすぎない。それぞれの陣営は、当初に占めた地点の上に牢固としてとどまり続ける」¹⁰⁰。これが従来の公式的評価である。Badelは、論争当事者たちが論争中もその後もいさゝい見解を変更しなかった事実を指摘し、多くの例を掲げている¹⁰¹。はるか後年になってからでも、クリスチヌ・ド・ピザンは息子に『バラ物語』とオウィディウスの読書を禁じることになる。両陣営ともに、相手側の主張に耳を傾けなかったし、またその後も傾けることはないだろう。しかし、公式的評価の後半部についてはいささか異論を立てる必要がある。すでに本稿中で何度か触れたように、各派の内部では論旨の変化・発展が確実に窺えるのである。実はここでも、論争は論争相手によって規定されている。それが単に拒否するためであつたにせよ、その限りにおいては反対者の主張がおそらく詳しい検討の対象とされ、そして自派の論陣の変化に反映されていることには、十分注意が払われてよい。

論争の移りゆきという観点からみれば、擁護派のほうがはるかに変化に富んでいるが、これは、出発点であるモントルーユ書簡(A)において彼らの主張がほとんど無に等しかった点に由来するものと思われる。忘失の書簡(A)の復元は、すでにPotanskyによって試みられてはいる¹⁰²。それは、ピザンの反論(C)とジェルソンの反『バラ物語』論(O)の双方に、いくつかの論点の驚くべきほどの一致を認め、そこから、書簡(A)の中にもそれらの論点が存在していた、と推測するものである。だが、すでに触れたようにピザンとジェルソンの反論はそれぞれ時期をたがえ、かつジェルソンの反論は意識的に論争の流れを再構成し、そのうえで自分の論旨を進展させるという構造を有するのであるから、むしろジェルソンがピザンの反論(C)のあらゆる論点を意図的に再現している、と考えなければならない。その中には、モントルーユの称揚書簡とは無関係に、ピザンが独自に掲げた論点も多く混じっていたことであろう。従って、Potanskyの

所論は論争の時間的推移と構成に無頓着であった、と評するべきなのである。

モントルーユ書簡(A)の復元にあたっては、ピザンの書簡(C)のみが主たる手がかりとなることは言うまでもない。まず、その前書きに「美しい修辭と真実らしい議論によって整えられた小論 un petit traité(II.11-2)」として書簡(A)が言及されている。この「小論」がどれほどの長さを示すのかはもちろん不明であるが、たとえそこに悪口の意味の指小辭を認めるにしても、モントルーユの他の書簡の平均的分量からみて、翌年のピエール・コルの書簡(Q)ほどの長さは望むべくもない。おそらくは他の書簡同様に短いものであったことだろう。ところで、ピザンが具体的にモントルーユ書簡の内容に言及するのは二ヶ所だけで、第一にピザンは「有用というよりまったくの暇潰しと呼ぶのがふさわしいこの作品に、あなたは間違えて根拠もなく実に完璧な賛辭を呈している」と責めた上で、「あなたは反対する人々を大層叱責し、『第三者が述べていることが示す通り、重要なことが理解されるべきで、つまり彼(ジャン・ド・マン)は非常に刻苦と長い年月の末に(作品を)作り上げたということだ』とおっしゃいますが」、だからといって自分がこの大作家を攻撃して不都合な理由はない、と主張する(II.22-9)。また、第二にピザンは本論部の冒頭で、<理性>が性器の名を口にした問題をあつかうに際して、イエスも聖書の中で娼婦 meretrix という語を用いているから、その本性が汚れたものを示す場合は汚れた名を使ってもよい、というモントルーユの所論を引き、それに対して反駁を加えている(II.76-94)。

後年のピエール・コル宛て書簡(R)に見られるピザンの執筆態度、すなわち、まず相手の所説を引いた上で自説を展開させるという形式を思い出す時、ここには明らかに共通する論争方式が認められるわけだが、冒頭の最初の論点においてのみモントルーユの所論が言及されるのはきわめて示唆的である。おそらくピザンとしては、もし反論に足る論点が数多く認められれば、それらに対して一つずつ反駁を加える労をいとわなかったと思われる。しかし彼女は、モントルーユの書簡の中に具体的な論争の手がかりをたった一つ見出しただけで、それを本論の冒頭に据えつけることで我慢しなければならなかったのであろう。つまりモントルーユ書簡は、ピザンが前書きで「私に宛てられたものではなく、しかも返答も求められてはおりません(II.18-9)」と述べているように、論争的な性格を有さぬ小論であった。それは、論拠をほとんど示さぬまま一方的に反対派を糾弾し、ジャン・ド・マンの高い評判のみを賞賛するものであったと推測される。

それでは、モントルーユは問題の書簡の中で、どのようにジャン・ド・マンを称揚したのか。これについては、モントルーユ書簡(D-H)とゴンチエ・コル書簡(I,J)に資料を求めねばならぬ。ただし第二節で触れたように、古典古代の書簡文学をむりやり気取った彼ら擁護派の手紙は具体性に乏しく、これらの書簡(D-J)の中で内容復元の糸口となりうるのは、わずかに第四節に引用したコル書簡(J)にみられる、「聖書について非のうちどころのない傑出した博士、高遠な哲学者、自由七学芸のあらゆる分野に精通し

た碩学」というジャン・ド・マン賞賛の一句のみである。奇妙なことではあるが、彼らは論争の渦中に巻き込まれたというのに、自己の立場を具体的な言葉によっては表明することをしない。Badelによれば、『バラ物語』の各部分はそれまで百科全書として機能し、またそのように評価され、誰もあからさまにその価値に疑いをいれる者はなかった。作品の全体を視野におさめた強固な反論にさらされたこの時になって、擁護派は言葉に詰まり、初めて作品の全体的な意味を自問するように仕向けられた¹⁷⁾、という。つまり、1401年夏の段階では、彼らにまだ作品の文学的な内容を検討する能力と習慣がなく、それゆえ、作者への定型的な賛辞しかのべることができなかったのである。忘失の書簡(A)もまた、他のモントルーユ書簡と同じ水準にとどまって、皮肉と韜晦によって表現を粉飾しながら、およそ『バラ物語』の内容には言及せず、いわば保証済のその作者の評判について賞賛の言葉を羅列するに終始していたのであろう。初期の擁護派の空疎な議論に対するピザンのいらだちはもっともで、これは彼女のコル宛ての返事(K)の中にあられる言い分であるが、神学的な観点から作品をよく眺め、どの点を私が攻撃し、どの点を攻撃していないのかを検討せよ(II.29-35)、という主張にもつながることになる。

ピザンにしてもジェルソンにしても、反対派はけっして『バラ物語』の百科全書的な知識を攻撃の対象とすることはなかった。大まかにとらえれば、彼らは、今日の観点からみたいわゆる「文学」的立場とは相いれない道徳論、および正統教義の観点から作品を批判する。空無であった擁護派の論拠にいわば少しずつ手さぐりで形が与えられるのは、こうした反対派の議論にさらされた後のことであるが、ある意味で言えばこの試みは、いまだフランス語ではそれ自体として論じられたことのなかった、その「文学」擁護のための言語、すなわち文学批評の方法の創造とも称することができる。それは、第六節に述べたように、モントルーユ書簡(P)において初めて形らしきものをとる。この時、その批評言語としてのフランス語の懐胎を書簡の宛先人という資格で見まもったところの人間が、詩人のオノレ・ブシェあるいはユスターシュ・デシャンであったことは興味深い。

ただし、実はその萌芽は、論争最初期の1401年7月から8月にかけて書かれたと推定されるモントルーユ書簡の中にぎざしていた。第三節で指摘したように、この時期、モントルーユには反対派の法曹家とのあいだで手紙の応酬があり、二通の書簡(D,H)が残されている。その第一の(D)書簡の冒頭に、「私はこの深遠な作品の(隠された)意味の重みと重みの(隠された)意味 *misteriorum pondera ponderumque misteria* とを探る」という表現があらわれるのである。ピザンの(C)書簡に典型的に示されるが、結局のところ反対派の最初の攻撃は、『バラ物語』が社会の良俗を損なうというものであった。それに対しモントルーユは、ひとりよがりの気配の漂う修辞の勝った表現ではあるけれども、『バラ物語』には皮相的でない深い意味がある、と切り返したことになる。しか

し(D)書簡にはこれ以上の文言はみられず、どのような意味が隠されているのかについては、一切の説明がなされぬままにおわっている。この段階でのモントルーユにとって、これ以上の説明は具体的な言葉の形をとり得なかったのであろうし、また、とる必要も認められなかったに違いない。

もう一つの萌芽が、ある時間を置いて同じ法曹家に宛てられた第二の書簡(H)の中にみられる。これは、(D)書簡に対する反論の手紙を得、それを再度反駁するために書かれているが、内容は例によって空疎で、『バラ物語』をよく読まないで議論をするなど相手をたしなめる趣旨の書簡である。ただし、冒頭には作者について、「あの尊敬おくあたわざる諷刺作家 satiricum ジャン・ド・マン師」という言及がなされており、わずかながらとはいえ、ここで初めて擁護派の作品理解の手がかりがあたえられることになる。

この段階で、「(隠された)意味」と「諷刺作家」とはどのような論理によって結合されていたのだろうか、あるいは、両者は併置されていただけなのだろうか。この問題については不明というほかない。モントルーユが諷刺の皮肉を媒介として探り出される裏の意味のことを考えていた、と単純には結論づけられないのは、それからほぼ一年を経て書かれた問題の(P)書簡の中で、第六節で述べたように、「諷刺作家」はむしろ登場人物の科白の正当化という論点のほうに引き寄せられてしまい、「(隠された)意味」の言い換えである「(作品の)真意」とは切り離されて理解されているからである。

実はここでモントルーユは、擁護派の議論の水準を引き上げる絶好の機会を逸したのであった。彼は古典文学の中でもとりわけホラティウスを愛好した²⁰⁾。従って、ジャン・ド・マンを諷刺作家と呼んだ時に、ホラティウスの『諷刺詩集』のことが思い浮かばなかったはずがない。その中には諷刺自体を主題とする三つの諷刺詩が含まれ、それを足がかりとして『バラ物語』の全体的な意味を見わたし、精密な擁護論を展開することもできたはずである。たとえば、「悪口は、私の作品や、まして私の意図するところから遠く、縁がない。もし何かこの私について約束することが出来るというなら、このことを誓って約束しておこう」²¹⁾という箇所からは、たとえば女性罵倒の言を弄しているように見える<老婆>や<ゲニウス>の科白の奥底にひそむ、「(隠された)意味」の正当性がただちに証明されたことであろう。また、さらに踏み入って、「ある時は悲しげな、ある時は陽気な言葉を用いることが肝心だ。その上、あるいは演説家の、あるいは詩人の役まわりを演じ、時には力量をおさえて、あえて能をかくす洗練もまた必要だ」²²⁾という箇所が目ざされてもよかったはずである。諷刺詩の文体についてのこの勧めからは、文体の混淆という技法のみならず、題材の混合というローマの諷刺詩の起源もまた明瞭に把握されたことであろう。そして、ホラティウスやオウィディウスの作品では、文体や題材が混じりあうその結果、しばしばある題材がそれと相いれない文体によって語られ、両者が意図的に齟齬をきたすのであるが、まさにこの点にこそ古典諷刺作品の妙味があった、ということまで洞察されたとしても決して

おかしくはなかった。なぜなら、すでに述べた通り(第六節を参照)、この時期ジェルソンは反『バラ物語』論(O)において登場人物とその言説の不適合性を衝いている。これを契機として十分な検討がなされていれば、その不適合性こそが古典の伝統に添った諷刺作品としての『バラ物語』の魅力である、という形でジェルソンに反駁し、反対派の議論の水準に追いつくことも可能だったからである。

実はここでモントルーユは、もっとも安易な道を選んでしまった。(H)書簡の中で「諷刺作家」という語を用いた時、念頭にホラティウスがあったことに異論はないとしても、おそらく彼は『詩論』劈頭の二行のほうを思い浮かべていたらしい。「画家にも詩人にも、なにごとをも題材に取り上げる正当な権利が常にあった」¹⁰¹という詩句は、とはいえホラティウス自身の見解ではなく、世の人一般の謬見としてそこに掲げられ、その後ホラティウスによって修正をくわえられてゆくのだが、どうやら擁護派は恰好の「権威」としてこの二行を文脈から切り離したものらしい。つまり、これを『詩論』の地の文として受けとり、諷刺作家自身が題材の自由を保証していると解釈したのである。モントルーユが問題の(P)書簡で、「この教育者(ジャン・ド・マン)がみずから諷刺作家の役割を引き受け、その結果、ほかの著作家に許されない多くの題材が彼には許されているのだということを、彼ら(反対派)は理解しない(II.26-8)」と述べるのは、まさにこうした事情によるものと思われる。さらにこの解釈は、擁護派の陣営で受け継がれてもいたらしい。というのは、ジャン・ド・マンは物語末尾のバラを摘むくだけで女性性器の譬えとして「聖所」および「聖遺物」という語を用いていたが、その点を反対派から攻撃されると、ピエール・コルもまた(Q)書簡の中でこの二行を引用し、「このようにして作者は詩的に描いているわけで、それというのもホラティウスの言うように、詩人にも画家にも、常になにごとをも描くことが許されていたからである(II.168-70)」と切り返しているからである。

擁護派は、「諷刺作家」という語から、作者や登場人物の不道德な科白の正当化に都合のよいこの二行しか導き出せなかった。しかもそれを自派の綱領として、原典の文脈を歪めてまで議論に用いたのは、道徳に立脚する反対派の攻撃が<老婆>や<嫉妬深い夫>に集中したため、それらの登場人物の科白をまず防御する必要に迫られたからであろう。また(P)書簡の中では「(作品の)真意」も、反対派は拾い読みしかせず作品を攻撃するという、作品の解釈とは関係を持ちにくい論点と結びつき、なんら具体的にその意味を説かれさえしない。これも、それだけ初期の反対派の攻撃がかたくなで、特定の部分にこだわりを持ちすぎたため、擁護派としては全体を振り返って「真意」を明かす余裕を奪われてしまったのであろう。つまり、擁護派の立場にいくぶんか同情して言えば、反対派の道徳論と皮相的な読解という二つの圧力が、文学論争の蕾のふくらむ微妙な瞬間を押し潰してしまったことになる。近年の『バラ物語』研究が手にした皮肉(アイロニー)という視点は、今一步のところで放棄されてしまったのだ。

たとえば未完の書簡(S)が象徴しているように、1402年秋の最後の論戦においてピエール・コルが完敗した最大の理由は、彼がそれまでの論争の経緯を把握せず、派としての論旨の継承に無頓着であったことだろう。ただし、論争全体の時間的変化を見わたし、論点相互の絡みあいばかりか論旨のつながり具合をも見抜き、否定しなければならぬ対象の美も味わう気配を匂わせながら、その上で駁論を新しい高みに引き上げるという作業を実現できたのは、ひとり反論(O)におけるジェルソンのみであった。これを希有な例外と判断すれば、むしろ立論のつど出発点に立ち戻り、議論のレベルを混同した論拠に頼る残余の論争当事者の論証法のほうが、時代の水準というものをあらわしていることになろう。すでに第7節で述べたところであるから詳説を避けるが、ピエール・コルは「諷刺作家」と「(隠された)意味」という二つの手がかりを結びつけなかった。また、「諷刺作家」を登場人物論に導入したモントルーユの所説を新しく展開しなかった。たしかに「(隠された)意味」という論点については、彼は独自に教化性という方向を提示し、当該作品からの引用という画期的な方法をもってピザンに挑んではいらぬ。だが、どこまでこの方法に自覚的であったかは、また別の問題であって、ピザンから引用の恣意性を指摘された時こそ、かえって彼女の心得違いを説き明かす好機だったにもかかわらず、彼は沈黙のうちに籠もってしまった。従って、時代の水準という観点からは、この方法もまた単なる偶然の所産であったと疑われるのである。

一方、反対派は、ジェルソンにしてもピザンにしても、たとえ正統教義や一般道徳にもとづくとはいえ、議論は強固な一貫性に支えられて揺らぎない。これは特にピザンについて言えることだが、時間的経過の観念を欠いてつねに出発点という基準に依る当時の論証法は、そうした信念の同一性の表明にまことにふさわしく、逆に、無からじょじょに新しい批評言語を創設するというような、擁護派が求められていた手さぐりの試みには適さなかったのであろう。さらに、ジェルソンには、『バラ物語』を享受しながらも職責上これを論難するという構えがあった。また、ピザンも、社会の良俗の保存という単純な道徳論を盾にしているようにみえるが、その実、たとえば最後の書簡(R)で、良識を失わず誠実に恋をすることも可能であり、自分の緩る韻文の主題もまたその種の誠意のこもった恋なのである(II.470-96)と述べている。つまり、彼女は『バラ物語』と拮抗する恋愛詩の実作者としての自負を秘めていた。もとより『バラ物語』後編は独身を余儀なくされる聖職者層伝来の文学であり、それが必然的にもなう好色な女性嘲弄は、どれほど学殖によって粉飾されようとも芝居がかり、矛盾をまぬかれ得ない。その『バラ物語』の百科全書的性格にいっさい眩惑されなかったジェルソンの構えとピザンの自負こそが、あるいは擁護派にとっては最大の障壁であったのだろう。

ともあれ、異端の脅しのもとでの沈黙と作品解釈の欠如という二重の不徹底のうちに、フランス語による最初の文学論争はおわったのである。

註.

- (1) 符号をつけた資料は4つのグループに分かれ、それぞれ別の伝承経路によって伝えられた。①1402年6月23日に編まれたピザン第一作品集に編入された書簡(これは同年2月1日に王妃に献呈された一件書類を再録したものと考えられる)——L,M,N,I,C,J,Kをこの順で集める。つまり1401年9月のコルとピザンの論争を再現した一件書類で、モントルーユの称揚書簡はおそらく意図的に除かれている。②1402年10月以降に編まれたピザンの作品集におさめられている書簡で、上記の他に末尾にRが加えられている。③モントルーユの自選書簡集——その中にB,D,E,F,G,H,Pが見出される。④擁護派の手によって、1402年秋のピエール・コルの議論を中心に編まれたと考えられる書簡集で、ジャン・ド・マンの作品集写本の中に組み入れられている——C,O,Q,R,Sをこの順でおさめる。従って、ピエール・コルが1401年6-7月のピザンの反論書簡Cとジェルソンの反『バラ物語』論の二つを対象に反論を書き、ピザンと論戦になった事情をつたえるために編まれたことが明らかである。なお、これら①-④のほか、ジェルソンの作品・説教は修道院系の独自の経路で伝承され、その中にO,およびTを見出すことができる。

つまり、論争の全体は、両派それぞれの伝承を総合しないと再構成されない仕組みになっている。見方を変えれば、それぞれの派が自分の立場から編んだ資料集であるのだから、その編集意図は無償とは考えられず、自派に不利な資料を故意に除外したことも当然疑ってよい。特に、①と②の系列のピザンに始まる伝承には、その傾向が強いものとおもわれる。

ところで、この論争は、当初は1400年から1408年にわたる比較的長期の論争と考えられていた。②経路の写本の王妃宛献辞(L)の日付け「mil cccc et uiu (anc. st.)」が採用された結果であるが、①経路の写本との校合から、これを mil cccc et un (anc. st.) の誤記と断じ、他の資料の年代についてもこれにともなう必要な訂正を加えた上、論争全体を1401年から翌年末の短期間に設定したのは、A. Piaget, «Chronologie des Epistres sur le Roman de la Rose», in *Etudes romanes dédiées à G. Paris*, 1891, pp. 113~120であった。それに従って編まれた Ch. F. Ward による資料集、*The Epistles on the Romance of the Rose and other documents in the debate*, Univ. of Chicago, 1911(——ただし筆者は未見)以降、基本的にはこの Piaget-Ward の提示した枠組みが踏襲されてゆく。

Ward の資料集に対するおもな訂正は以下の二つである。まず第一に、E. Langlois, «Le Traité de Gerson contre le Roman de la Rose», *Romania*, tome 45(1919), pp. 23~48は、Ward の載せるジェルソンの *Tractatus contra Romantium de Rosa* が16世紀初頭のラテン語訳にすぎないことを論証し、あわせてその原典のフランス語版を公刊した。第二に、A. Combes, *Jean de Montreuil et le chancelier Gerson*, Paris, 1942

は、それまでジェルソン宛と考えられていたモントルーユの書簡のすべてに宛先の疑問を提示し、本稿中にも示されるように、モントルーユは称揚書簡(A)をジェルソンには送っていない、と結論づけた。

『バラ物語』論争は、1970年代に入ってから再び注目を集め出したようである。おそらく、P. Potansky, *Der Streit um den Rosenroman*, Munich, 1972(——ただし筆者は未見)によって口火を切られたものと思われるが、Wardの資料集の英訳が、J. L. Baird & J. R. Kane, *La Querelle de la Rose : Letters and Documents*, 1978となっており、あらわれた。ただし、翻訳は実際にはその前年度に完成されており、E. Hicksによる新しい資料集、*Le débat sur le Roman de la Rose*, Paris, 1977と、いくつかの資料の重要な年代変更を論証したE. Hicks & E. Ornato, «Jean de Montreuil et le débat sur le Roman de la Rose», in *Romania*, Tome 98(1977), pp. 34-64, および pp. 186-219を参照していない。

なお、本稿では以下、上記のE. Hicksの資料集のテキストに依拠し、これを『資料集』として指示する。

- (2) 当然のことながら、各時代ごとの資料解釈が、論争の再構成に反映されることになる。M. - J. Pinet, *Christine de Pisan, étude biographique et littéraire*, Paris, 1927(特に pp. 64-87)では、ピザンとジェルソンは緊密な共同戦線を展開したように解釈され、反対派の旗色はきわめてよい。しかし、ホイジンガ、『中世の秋』(中央公論社、堀越孝一訳、239-243ページ)は、ほぼ同じ時期の1919年に完成されたものだが、『バラ物語』の人気を力説するという論旨の必要上、擁護派の勢いを実際以上に大きく描いてしまったようである。

なお『バラ物語』受容史の観点から初めてこの論争を取り上げたのは、L. Thuasne, *Le Roman de la Rose*, Paris, 1929であろうが、最近においてはP. - Y. Badelの*Le Roman de la Rose au XIVe siècle*, Genève, 1980という、14世紀における『バラ物語』理解のためには欠かせない労作がある。

- (3) «L'Epistre au dieu d'amours», in *Oeuvres poétiques de Christine de Pisan* (S. A. T. F.), tome II, pp. 1-27.
- (4) A. Coville, *Gontier et Pierre Col et l'humanisme en France au temps de Charles VI*, Paris, 1934(Slatkine Rep. 1977), pp. 117-139.
- (5) *ibid.* p. 78.
- (6) E. Hicks & E. Ornato, «Jean de Montreuil et le débat sur le Roman de la Rose», pp. 49-54.
- (7) ジャン・ド・モントルーユの書簡番号は、Jean de Montreuil, *Opera*, vol. I : *Epistolario*, éd. E. Ornato, 1963による。筆者はこの著作集を未見であるが、その順番はB. N. lat. 13062 番写本所載のモントルーユ自選書簡集によるものらしい。なお、書簡の初文(インキピット)と推定名宛人の一覧表は、A. Combes, *Jean de*

Montreuil et le Chancelier Gerson の巻末 pp. 617-622 に載る。

- (8) 引用行数は Hicks の『資料集』所載のテキストによる。なお、以下のレジメ中の行数は、かならずしも Hicks 版の段落分けとは一致しない。
- (9) Horatius, *De Arte Poetica*, vv. 333-4. 「詩人たちは人の役に立ち、さらに人を悦ばせることを望む。あるいはまた、生活のために心地よく、益にもなることを言わんと欲する」。

Jean de Meun, *Le Roman de la Rose* (S. A. T. F.), vv. 15240-2 「というのも昔の作品が述べているように、有益と楽しみ、これが詩人の意図するすべてなのだ」。

- (10) ピザンの覚書(N)にあらわれる高名な学者 un notable cleric は、初め通説によればジェルソンだと考えられていた。つまり、モントルーユは、その当初から反対派の二名に称揚書簡(A)を送り、挑戦の姿勢をあらわにしていた、というのである。この仮説はたしかに論争を劇的に仕上げはするが、根拠に乏しく、註の(1)にも述べた A. Combes, *Jean de Montreuil et le chancelier Gerson*, 1942 が、それまでジェルソン宛てと考えられていたモントルーユの何通かの書簡を検討し、そのすべてに疑問を投げかけて、両者のあいだの手紙のやりとりを否定して以来、高名な学者はジェルソン以外の人物であるとするのが定説となっている。

事実、二人はナヴァール学寮の同窓とはいえ、1363年生まれのジェルソンはモントルーユより10才ほど年下で、二人が机を並べていたとは考えにくい。

また、ジェルソンは、1390年代の前半を中心に、国王や王妃の前に説教をしており、この時ピザンと顔見知りになったとも考えられるが、後のピエール・コル宛て書簡(T)でピザンのことを揶揄をこめて virago 「女戦士」と呼び、彼女と同列に扱われることを嫌っている。この事実一つをとっても明らかのように、少なくともこの論争に関する限り、ジェルソンの側からピザンに対して特に親しい感情を抱いているとはみえない。書簡(T)は、時に威嚇的な言い回しが混じるとはいえ、むしろピエール・コルをやさしくたしなめる箇所さえ含んでいる。

- (11) このジェルソンの説教 «Considerate lilia» は、M. Lieberman, «Chronologie gersonnienne», in *Romania*, tome 83(1962)によって、初めてこの論争に関与することが認められ、以後、たとえば Hicks は、いくつかのモントルーユ書簡の年代決定の手おしを図ることになった (cf. E. Hicks, 『資料集』, p. xlviii)。
- (12) M. - J. Pinet, *Christine de Pisan*, p. 37.
- (13) A. Covillé, *Gontier et Pierre Col...*, pp. 46-50 ; E. Hicks & E. Ornato, «Jean de Montreuil...», pp. 54-5.
- (14) この時期、ラテン語書簡でも丁寧語法の vos がひろまっていた (cf. E. Hicks, 『資料集』, pp. 203-4)。たとえばモントルーユは書簡(E,G)では vos を用いて問題の聖職者に敬意を示し、コル以下の古典愛好仲間には tu をつかっている。もちろん、古典古代の語法を意識的に模倣しているわけだが、すでにフランス語でも丁寧語法

の vous が定着していたらしく、さすがに tu で呼ばれたピザンには不愉快の念が生じたらしい。ゴンチエ・コルも (J)、さらにピエール・コルも (後出の Q)、ピザンを tu で呼ぶに際して、これは古代人をまねた学問ある人間のあいだでの慣用だ、と書き添えているけれども、おそらく多少の揶揄ないしは嘲弄がこめられているものと思われる。

- (15) Christine de Pizan, *Le Livre de la Cité des Dames*, traduit par E. Hicks & T. Moreau, 1986, pp. 52~4.
- (16) A. Coville, *Gontier et Pierre Col* ..., p. 19.
- (17) «Le dit de la Rose», in *Oeuvres poétiques de Christine de Pisan* (S. A. T. F.), Tome 2, pp. 29~48. また、M. - J. Pinet, *Christine de Pisan*, pp. 82~4. もまた参照。
- (18) E. Hicks & E. Ornato, «Jean de Montreuil...», pp. 207~10. Hicks によれば、この詩人はデシャンである可能性が高いという。
- (19) Fol Amoureux とは、もちろん『バラ物語』の主人公で、バラを恋する一人称の語り手 <私> であるが、この <私> に対する言及はふつう <恋人> Amant ないし <狂恋の恋人> という名称のもとになされる。
- この <恋人> と作者ジャン・ド・マンとの区別が明瞭には設けられなかった点にもまた、論争の紛糾した原因の一つが求められるが、本稿ではその問題を取り扱う余裕がなかった点をここに断っておかねばならない。ただ、おおまかな傾向として、両派ともにじょじょにこの区別を認識したように思われる。
- (20) S. A. T. F. 版の行数に従う。(以下同じ)
- (21) ほかに、vv. 4429~30, 4463~5, 6322 が引用されている。
- (22) コルは二つの引用を付す。vv. 12970~5, 13139~40.
- (23) 同じく六つの引用を付す。vv. 15209~10, 15252~6, 15173~5, 15234, 15203 (引用順)。
- (24) P. - Y. Badel, *Le Roman de la Rose au XIVe siècle*, p. 414.
- (25) *ibid.* pp. 414~7.
- (26) J. L. Baird & J. R. Kane, *La Querelle de la Rose*..., p. 39 所載のレジユメによる。
- (27) P. - Y. Badel, *Le Roman de la Rose*..., p. 431.
- (28) A. Coville, *Gontier et Pierre Col*..., passim.
- (29) Horatius, *Satirae*, I, iv, 101~3.
- (30) *ibid.* I, x, 11~4.
- (31) Horatius, *De Arte Poetica*, vv. 9~10.